

21世紀の東京大学

・・・多様性・国際性・開かれた知の拠点

大学。かつて人類が産みだした、もっとも高度な知の組織体が、時代の要請に従って、いま大きく変わりつつあります。新しい世紀、新しいミレニアムに、世界と大学はどのような変貌を遂げてゆくのでしょうか。その全容は計り知れず多様です。私たちが実際に迎えた21世紀は、20世紀の間に夢見られた未来像とは大きくかけはなれ、人類はさまざまな問題に直面しています。それら「多様な」社会のニーズに応えるべく、専門領域をこえたさまざまな知を動員して、大学はかつてない複雑なアウトプット群を産みだすことを求められています。グローバリゼーション後の世界が、「多様性」と「国際性」に開かれた新しい知の拠点としての役割を、大学に期待しているのです。

東京大学は「21世紀の問い」にいかにか答えてゆくのか?本特集では、まずは世界や日本の歴史の流れの中における東京大学の変遷を見極め、2001年における現状を把握し、そして部局長たちの語るさまざまな将来構想の中から「開かれた知の拠点」としての東京大学の未来を展望してみたいとおもいます。



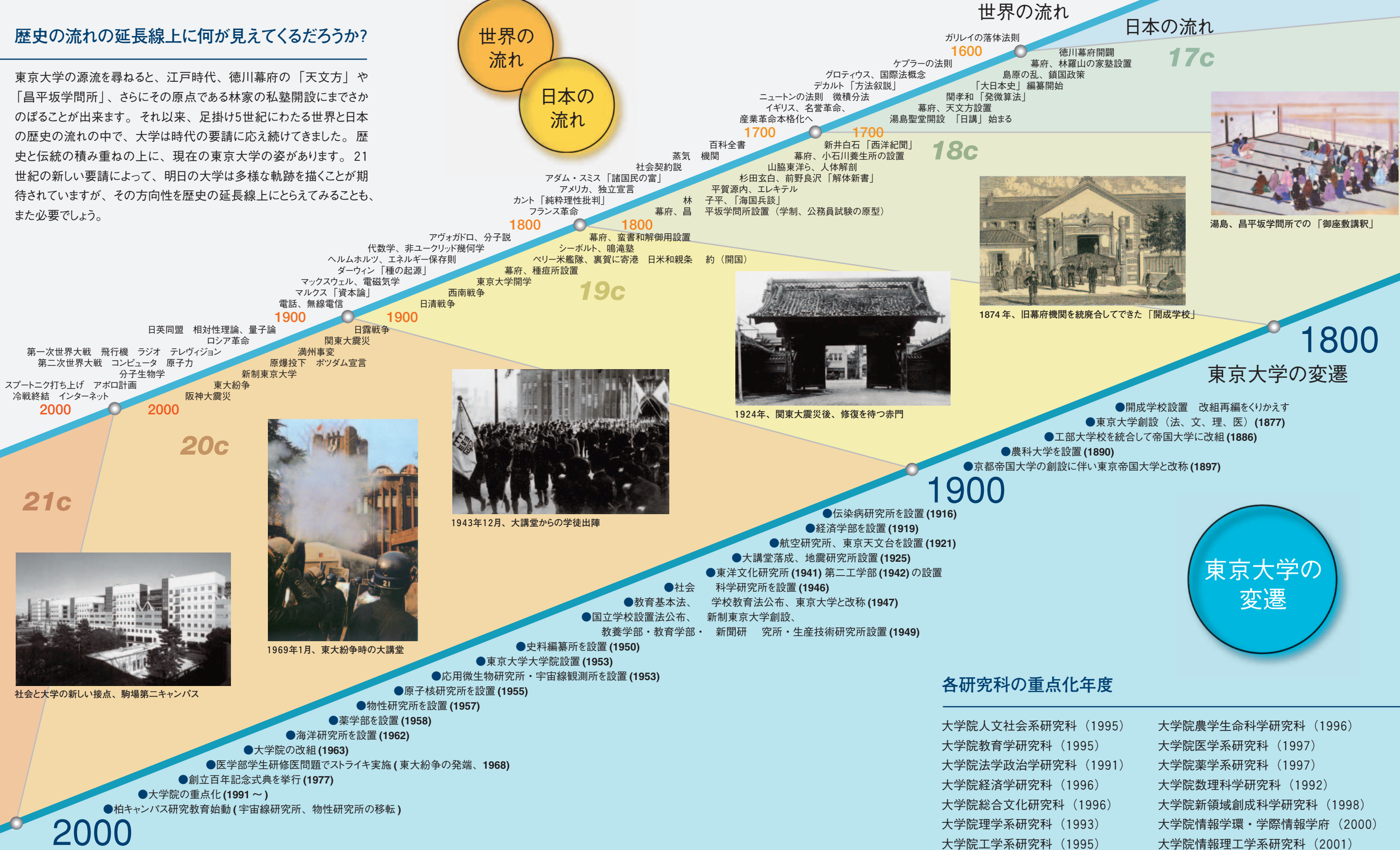
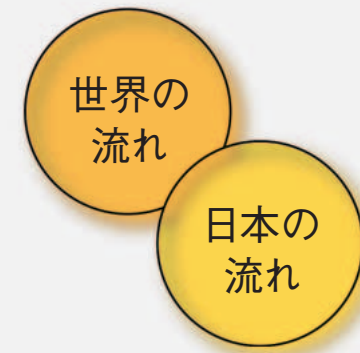
21世紀の夜明けをライトアップで迎える
東京大学大講堂 2001年1月1日



新しい時代を切り開くため、「学融合」の役割を担い建設が進められる東京大学柏キャンパス

歴史の流れの延長線上に何が見えてくるだろうか？

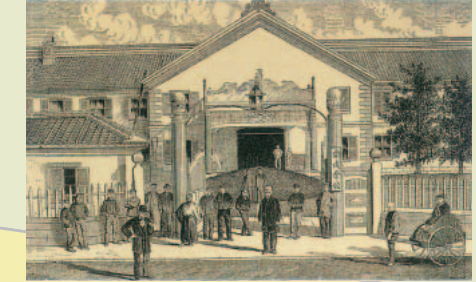
東京大学の源流を尋ねると、江戸時代、徳川幕府の「天文方」や「昌平坂学問所」、さらにその原点である林家の私塾開設にまでさかのぼることが出来ます。それ以来、足掛け5世紀にわたる世界と日本の歴史の流れの中で、大学は時代の要請に応え続けてきました。歴史と伝統の積み重ねの上に、現在の東京大学の姿があります。21世紀の新しい要請によって、明日の大学は多様な軌跡を描くことが期待されていますが、その方向性を歴史の延長線上にとらえてみることも、また必要でしょう。



世界の流れ

日本の流れ

1600 ガリレイの落体法則
 1700 ニュートンの法則 微積分法
 1700 ケプラーの法則
 1700 グロティウス、国際法概念
 1700 デカルト「方法叙説」
 1700 イギリス、名誉革命、産業革命本格化へ
 1700 百科全書
 1700 社会契約説
 1700 アダム・スミス「諸国民の富」
 1700 アメリカ、独立宣言
 1700 カント「純粋理性批判」
 1700 フランス革命
 1700 蒸気機関
 1700 新井白石「西洋紀聞」
 1700 幕府、小石川養生所の設置
 1700 山脇東洋ら、人体解剖
 1700 杉田玄白、前野良沢「解体新書」
 1700 平賀源内、エレキテル
 1700 子平、「海国兵談」
 1700 平坂学問所設置（学制、公務員試験の原型）



湯島、昌平坂学問所での「御座敷講釈」

1874年、旧幕府機関を統廃合してできた「開成学校」

1800 東京大学の変遷

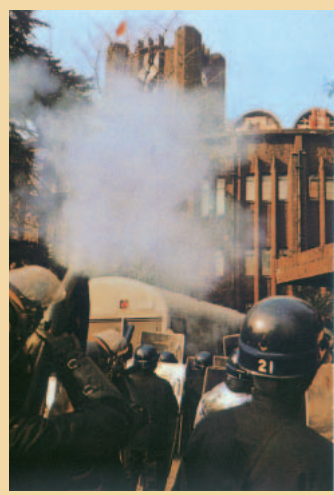
- 開成学校設置 改組再編をくりかえす
- 東京大学創設（法、文、理、医）（1877）
- 工部大学校を統合して帝国大学に改組（1886）
- 農科大学を設置（1890）
- 京都帝国大学の創設に伴い東京帝国大学と改称（1897）

1900

- 伝染病研究所を設置（1916）
- 経済学部を設置（1919）
- 航空研究所、東京天文台を設置（1921）
- 大講堂落成、地震研究所設置（1925）
- 東洋文化研究所（1941）第二工学部（1942）の設置
- 科学研究所を設置（1946）
- 学校教育法公布、東京大学と改称（1947）
- 新制東京大学創設、
- 新聞研究所・生産技術研究所設置（1949）
- 社会
- 教育基本法、
- 国立学校設置法公布、
- 教養学部・教育学部・



1943年12月、大講堂からの学徒出陣



1969年1月、東大紛争時の大講堂

東京大学の変遷

各研究科の重点化年度

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 大学院人文社会系研究科（1995） | 大学院農学生命科学研究科（1996） |
| 大学院教育学研究科（1995） | 大学院医学系研究科（1997） |
| 大学院法学政治学研究科（1991） | 大学院薬学系研究科（1997） |
| 大学院経済学研究科（1996） | 大学院数理科学研究科（1992） |
| 大学院総合文化研究科（1996） | 大学院新領域創成科学研究科（1998） |
| 大学院理学系研究科（1993） | 大学院情報学環・学際情報学府（2000） |
| 大学院工学系研究科（1995） | 大学院情報理工学系研究科（2001） |



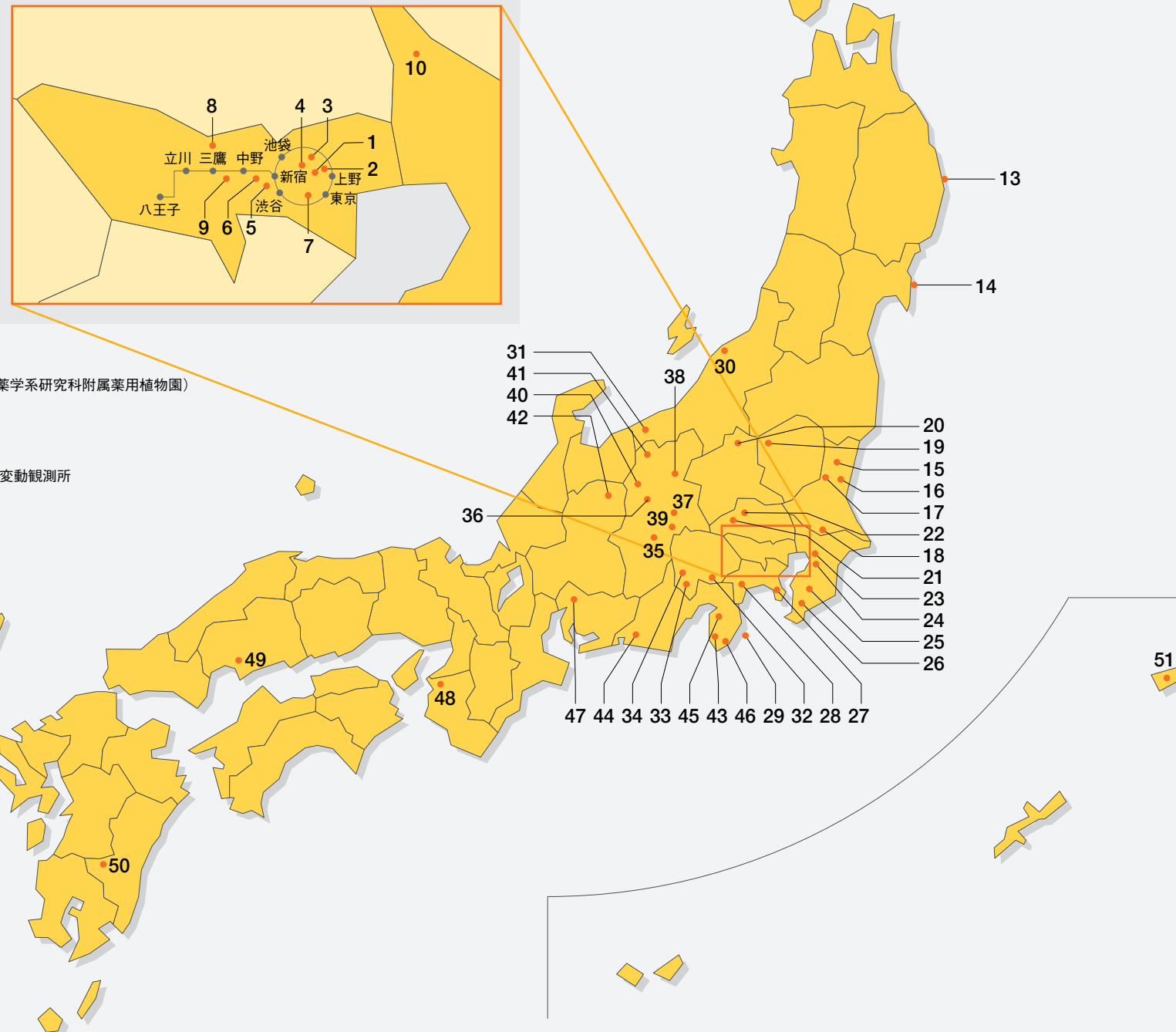
社会と大学の新しい接点、駒場第二キャンパス

2000

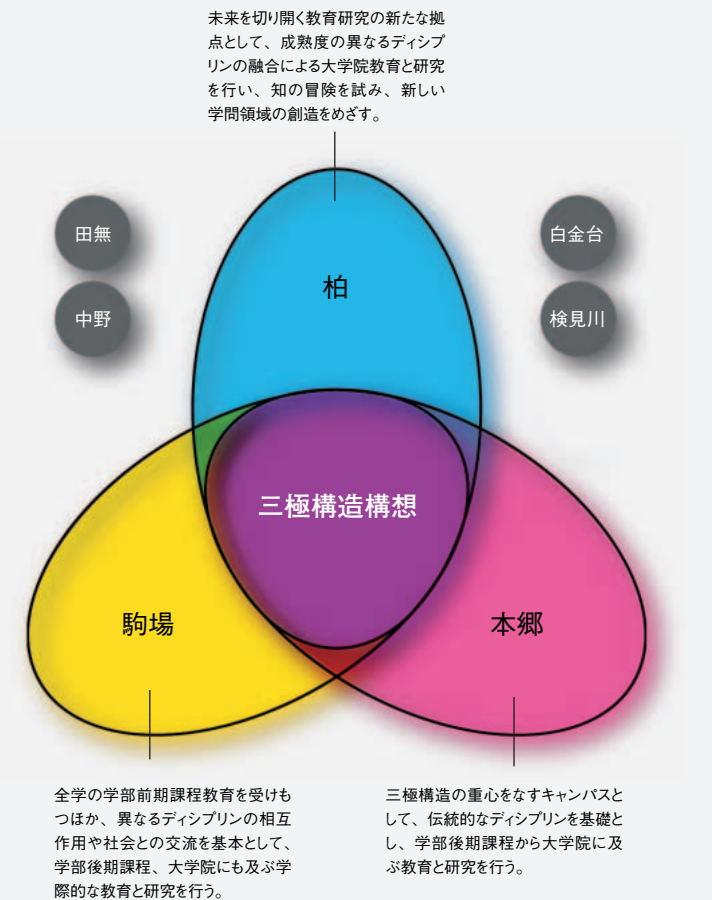
- 大学院の重点化（1991～）
- 柏キャンパス研究教育始動（宇宙線研究所、物性研究所の移転）
- 創立百年記念式典を挙行（1977）
- 医学部学生研修医問題でストライキ実施（東大紛争の発端、1968）
- 大学院の改組（1963）
- 海洋研究所を設置（1962）
- 薬学部を設置（1958）
- 物性研究所を設置（1957）
- 原子核研究所を設置（1955）
- 応用微生物研究所・宇宙線観測所を設置（1953）
- 東京大学大学院設置（1953）
- 史料編纂所を設置（1950）

- 1 本郷地区 事務局、附属図書館、法学政治学研究所・法学部、医学系研究所・医学部、医学部附属病院、工学系研究所・工学部、人文社会系研究所・文学部、理学系研究所・理学部、経済学研究所・経済学部、教育学研究所・教育学部、薬学系研究所・薬学部、新領域創成科学研究科、情報理工学系研究所、情報学環・学際情報学府、東洋文化研究所、社会科学研究所、社会情報研究所、史料編さん所、総合研究博物館、環境安全研究センター、遺伝子実験施設、留学生センター、大学総合教育研究センター、医学教育国際協力研究センター、保健管理センター、素粒子物理国際研究センター等
- 2 浅野地区 工学部附属総合試験所、低温センター、アイソトープ総合センター、原子力研究総合センター、高温プラズマ研究センター、情報基盤センター、大規模集積システム設計教育研究センター等
- 3 弥生地区 農学生命科学研究科・農学部、農学生命科学研究科附属演習林、地震研究所、分子細胞生物学研究所、生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー等
- 4 小石川地区 旧医学部附属病院分院、理学系研究所附属植物園等
- 5 駒場地区 総合文化研究科・教養学部、数理科学研究科、生産技術研究所、先端科学技術研究センター、人工物工学研究センター、国際・産学共同研究センター、気候システム研究センター、駒場オープンラボラトリー、空間情報科学研究センター、先端経済工学研究センター、インターナショナルロジ等
- 6 中野地区 教育学部附属中等教育学校、海洋研究所
- 7 白金地区 医科学研究所、同附属病院、インターナショナルロジ等
- 8 田無地区 農学生命科学研究科附属農場、農学生命科学研究科附属演習林田無試験地
- 9 三鷹地区 理学系研究所附属天文学教育研究センター等
- 10 柏キャンパス

- 11 人文社会系研究所附属北海文化研究常呂実習施設
- 12 農学生命科学研究科附属北海道演習林
- 13 海洋研究所附属大榎臨海研究センター
- 14 地震研究所附属江の島津波観測所
- 15 工学系研究所附属原子力工学研究施設、物性研究所附属中性子散乱研究施設
- 16 農学生命科学研究科附属農場
- 17 農学部放射線育種共同利用施設
- 18 地震研究所附属地震地殻変動観測センター筑波地震観測所
- 19 理学系研究所附属植物園日光分園
- 20 谷川寮
- 21 農学生命科学研究科附属秩父演習林
- 22 地震研究所附属地震地殻変動観測センター堂平観測所
- 23 検見川地区（検見川地区総合運動場、農学生命科学研究科附属緑地植物実験所、薬学系研究所附属薬用植物園）
- 24 生産技術研究所附属千葉実験所
- 25 農学生命科学研究科附属千葉演習林
- 26 地震研究所附属地震地殻変動観測センター鋸山地殻変動観測所
- 27 理学系研究所附属臨海実験所、地震研究所附属地震地殻変動観測センター油壺地殻変動観測所
- 28 農学生命科学研究科附属農場二宮果樹園
- 29 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター伊豆大島火山観測所
- 30 地震研究所附属地震地殻変動観測センター弥彦地殻変動観測所
- 31 池の平寮
- 32 農学生命科学研究科附属富士演習林、山中寮
- 33 地震研究所附属地震地殻変動観測センター富士川地殻変動観測所
- 34 宇宙線研究所附属明野観測所
- 35 理学系研究所附属天文学教育研究センター木曾観測所
- 36 地震研究所附属地震地殻変動観測センター信越地震観測所
- 37 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター浅間火山観測所
- 38 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター小諸火山化学研究施設
- 39 地震研究所附属八ヶ岳地球電磁気観測所
- 40 宇宙線研究所附属乗鞍観測所、同鈴蘭連絡所
- 41 野尻寮
- 42 宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設
- 43 農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所
- 44 農学生命科学研究科附属水産実験所
- 45 戸田寮
- 46 下賀茂寮
- 47 農学生命科学研究科附属愛知演習林
- 48 地震研究所附属地震地殻変動観測センター和歌山地震観測所
- 49 地震研究所附属地震地殻変動観測センター広島地震観測所
- 50 地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター霧島火山観測所
- 51 医科学研究所附属奄美病害動物研究施設



東京大学は、本郷、駒場、柏キャンパス三極構造を中心として、未来を切り開く世界の大教育研究拠点として21世紀の要請に応えようとしています。三極構造の重心をなす伝統を担う「本郷キャンパス」、全学の学部前期課程教育を受け持つほか、社会と幅広い交流を基本とする「駒場キャンパス」、知の冒険を試み、新しい学問領域の創造を目指す「柏キャンパス」の三者を中心に、知を創出し、世界の学問研究をリードしてゆきます。



キャンパス三極構造

様々な未来像

「多様性」「国際性」。開かれた東京大学の未来はいろいろな横顔をもっています。

さまざまな部局で指導的立場にある八人の東京大学教授に、大学の未来、可能性と展望を語っていただきました。



小宮山 宏 教授

大学院工学系研究科長・工学部長

人類の知が直面する本質的困難は、誰にも全体が見えなくなってしまったこと、例えば諫早湾の堰の問題など誰にも全体像が見えません。ところがその原因は、分業という知の発展形式の結果によるものなのです。

▽ 本文へつづく

元来は素晴らしい「分業」による知の発展の結果「問題の複雑化と領域の細分化」が生じたこと、いま必要なのは「知の構造化」です。人間は三次元空間に生きていますから、パラメーターが三つ程度の知識空間なら直感的に理解可能ですが、私たちが直面する複雑な問題には数百ものパラメーターが関わり、各々の専門家がみな別の軸で考えています。数百の異なる視点間に対応がつかない、そうした状態をすっきり整理したい。実は領域の細分化といっても、個々の領域の原理

は意外と簡単で共通する場合も多いのです。その境界を明確化して領域間の関係を明示する「知の構造化」が出来れば、知識はITに実装されます。工学系研究科では「知の構造化・五大プロジェクト」として、学術創成、社会技術、ナノテクノロジー、失敗学、産業技術に関する知の構造化に取り組み始めました。グーテンベルク以来人類を支える活字による方法に加え、真に革命的な知識基盤を生み出す取り組みです。私は学生に「広く学べ」とだけ言うことに反対です。広いだけでは底の浅い評論家です。「深く」「広く」学ぶ必要があります。IT実装された知識基盤が縦横に整備されれば、過剰な情報の海を「斜め」に深く進んでゆく「知の水先案内」に従って、無用な不安なしに柔軟な学習が可能です。研究者も激しく変動し複雑化する社会や専門領域の中で、自らを明確に位置付けて研究教育を推進できます。大学は問われる前に社会に「発信」し、意志をもって「全体像」を見出し、それを「有言実行」に移して広く社会に問い、柔軟な「知のネットワーク」で答える新たな標準に移ってゆくでしょう。二一世紀の大学は時と空間の制約を超えて人が集い、知が沸騰して様々に構造化する拠点に生まれ変わると思っています。



林 良博 教授

大学院農学生命科学研究科長・農学部長

農学に携わる教職員・学生は「生命には必ず始まりと終わりがあること」を知っておりますので、どのように波乱万丈の世紀にあらうと、右往左往せず落ち着いた対応を好みます。

▽ 本文へつづく

しかし、落ち着くというのは、蛸壺に閉じこもることではありません。農学は、おなじように「生産」に携って人類に貢献する工学分野の「造る生産」(making)と異なり、「育てる生産」(growing)を担っておりますので、「育つ対象」である生き物の自立性・自主性を無視できません。そのため遅延として発展しない「愚鈍」な学問のように見做されることもありました。しかしこの歩みの遅さのゆえに、本来人類が継承すべきものを二〇世紀に失わずに済んだ

面があり、それが皮肉にも二一世紀に農学が期待される理由の一つかもしれません。トラック競技でいえば、農学は「一周遅れの先頭ランナー」になったということです。これには良い点と問題点があります。良い点は二〇世紀、とくにその後半、自信を喪失していた感のある農学が、セルフ・エスティーム(自尊心)というより「自分もそんなに悪くない」という程度の自尊感情)を取り戻したことです。問題点は、やはり一周遅れですので、全国的な期待に応えられないだけの実力を有しているか、今後問われることになりま。応用科学として実力を淡々と蓄積していくと共に、二〇世紀の科学が成し得なかった、しかし極めて重要な課題である「関係性」と「多様性」について、農学という切り口からの説明が求められます。これは普遍性を追うことのみ汲汲としていた二〇世紀科学を、その呪縛から解き放ち、多様な生き物の個性や地域性に光を当てていくことを意味します。また農学は、ヒトと他の生き物との関係、生き物とそれを取り巻く環境との関係を扱う学問です。この特性を生かし、観察や実験における主体と客体の関係性が根本から問い直されるでしょう。農学は面白くなります。

Interview <<<

鶴尾 隆 教授

分子細胞生物学研究所長



大学全体として「生命科学」あるいは「情報科学」など、21世紀の大問題に対して、どのような方向で向かってゆくか、例えば「東大の生命科学」としてどのように各部署が有機的に連携してゆけるか、が問われると思います。

▶ 本文へつづく

分子細胞生物学研究所は「創成」をキ―に「ゲノム以後」の生命科学に取り組みます。農学部、医学部、薬学部など、東京大学の各「学部」組織が科学の基幹部分に責任を持つとするなら、分子細胞生物学研究所は、常に社会動向を念頭に置いて、新しい創造を推進します。学問自体が変わってきているのです。私はがんの研究に携っています。私のがんの研究に携っています。今やがんは怖い病気ではありません。遺伝情報が解りつつあり、むやみに恐れる必要はありません。七〇〜八〇年代にかけての「ゲ

ノム研究」や「バイオ・がん研究」の成果で、九〇年代初に抗がん剤は「がん細胞を殺す薬」から「がん細胞の死の情報スイッチをオンする、あるいは生存情報スイッチをオフするシグナルを送る薬」へと理解が転換しました。この間、分子細胞生物学研究所も、学内外の研究組織、企業と連携して、ゲノム情報に基いた創成研究を指向し続けて来ました。タンパク情報に基づく機能・物質デザインが可能となつて、患者さん一人一人の遺伝情報に基づいてオーダーメイド治療に向かつて着実に進んでいます。脳研究などもゲノム以後大きく変化しています。情報化の進展で、生命科学の先端研究は世界に瞬時に共有化されるようになりました。これは同時に、生命科学が典型的な「分散型研究」であることも意味します。三五、〇〇〇以上ものヒト遺伝子を対象とすれば、研究体制は分散型にならざるを得ません。分散型アドミニストレーションに適した大学の組織作りが大切です。建物だけが必ずしも重要なのではなく、組織体制、教育や入試なども含めたネットワーク化や、きちんとした評価のシステムも重要です。創薬の臨床開発では企業との協力も欠かせません。二一世紀「情報」「生命」「疾病」をキーワードに「応用」「創成」を続けたいと考えています。

坂内 正夫 教授

生産技術研究所長



「21世紀の東京大学」は、大学を構成しているおのおのの部署レベルの個性を、より明確化しながら、さらに全体を統合して、いかなる具体的なアウトプットを社会に送り出してゆくかが、一番問われていると思います。

▶ 本文へつづく

このように考えるとき、大学の本質は何か、といった、一見青臭い議論に改めて取り組むことが極めて重要です。即ち「大学は本来、次の世代に残すべき「価値」を創造する義務、世界の「知恵と人材」を作り出す使命を社会に負っている」という理念と使命を再認識して、それに基づく行動が必要になるでしょう。生産技術研究所では、このために、既存分野を挑戦的に融合して、社会への新しい価値創造を行う「ダイナミック融合工学」を、部署としての研究ターゲット

に決めました。この方針に従って「大部門十戦略化機構」など、多くの工夫を凝らして、体制を整えてきました。また一方、教育については、「将来どこかで「花を咲かせる」人材」を基礎から育てる教育、いわば「吉田松陰的教育」、と私は呼んでいるのですが、このような教育の大切さが挙げられます。さらに、これに加えて、社会や産業界に機動的に対応できる「ターゲット型大学院教育」も極めて重要です。生産技術研究所はこの二つを教育の柱として基本に据えて考えています。アメリカ主導によるグローバル化の趨勢にはいろいろな問題があります。そのような趨勢の中で、真に国際的にインパクトのある知的生産物、アウトプットを産み出し続けて行くことを真剣に考えてゆかねばなりません。これらを集約して、二〇〇〇年には「国際総合工学研究所」宣言を行いました（<http://iis.u-tokyo.ac.jp>）。二〇世紀の間は、誰も大学に「国際社会に対して攻撃性のある知」を求めたりはしませんでした。二一世紀の多様なニーズに対して、大学は、シンプルな方向性をもって、明確なターゲット定め、それを一つ一つ落としてゆくことが大切です。それによって、大学が存在している証を立てて行くべきだと思えます。

様々な未来像

河野 通方 教授

大学院新領域創成科学研究科長



大学の未来を考える鍵はスクラップアンドビルド、何をスクラップにして、何を新たに創るか、が問題になります。社会は大学に有形の成果を求めて来ましたが、無形の成果も大切で、それをどう評価するかは極めて重要です。

▶ 本文へつづく

東京大学の入学試験、あるいはより広く大学入試の制度を含め、子供の教育体系全体を見直す上では、拙速に流れることは禁物です。今後、日本が国際社会でどのように生き残っていくか、明治維新以来の「富国強兵」あるいは戦後の「戦争」や、二〇世紀後半の出来事なども、あらためて正面から見直し、今後、未来に向けてどういうものを創ってゆくか考える必要があります。新領域創成科学研究科では研究面では「学融合」、教育面では学部学生を持たない独立研究科として既存学部と研究所とを

結び、運営面では独自の学術経営委員会制度を持つ「開かれた研究科」として、「柏憲法」のもと国の「科学技術基本計画」の全要素に 대응する将来プランを進めています。大学は社会と全面的な対決も辞さずに、本質的な論争、ディベートの場をもつべきです。それが民主主義だと思っています。また地域との協調は重要です。仮に本郷から東大が出てゆくとして、地元からどれほど慰留されるでしょうか？ 柏では地域との密接な協力関係を大切にしています。同時に、国立大学としての東大が首都圏の地域大学化してはいけません。国全体のために必要なものを、本当にゼロから教官と学生と一緒に作り、世に問うべきです。大学はピュア、純粋でありすぎてはいけません。いろいろな考えを持つ人が集まっていなくては、ものを考えるスタミナがなくなってしまう。中国の故事に「食客三千人」とあるように、目の前の目的だけに汲々とするのではなく、多様な考え方の「居候」が緩やかに連携してこそ、強い生命力のある「学融合」の基盤となり得るのです。多彩な能力の研究者が常に流動し、意識ある学生たちが学ぶ環境、そこからこそ、価値構造自体が作り直されてゆく、そういう大学経営が二一世紀には必要になるでしょう。

濱田 純一 教授

大学院情報学環長・学際情報学府長



「情報学」は「21世紀の人間学」だと思います。東京大学の最大特徴の一つは、それぞれの学問分野での深い実績、いわば縦穴の深さにあります。その深さを横向きにしたらどうなるか、というのが「情報学環」の発想です。

▶ 本文へつづく

基礎となる伝統的な部局の教育研究が非常にしっかりしているのが東大の良さです。様々な学際的組織の試みが難問に直面する中で、今まで東京大学が積み重ねてきたのとは違う形で、異質なカルチャーが相互に結び合っ、二一世紀の新しい魅力を生み出せないか。従来の部局の中で、必ずしも各教官が、持てる能力のすべてを発揮出来なかつたかもしれない。旧来「脇にそれた」と見られた力を、大学の総合力の中に活かす場を設けるためには、適切なテーマが必要で、「情報」はその典型で、従来の学問

分野ではカバーしきれなかつた対象に、人々が集い知の実験に参加する。今まで十分に組み込まれてはなかった「アート」「メディア」なども、「抜け落ちてきた部分を拾いあげる」というより、「より幅広く問題を見るとき、今までやってこなかつたことも当然射程に入ってくる」という形で、おのずと取り組む対象になって来たと思います。情報という切り口からは、信号的に要素分解する視点とともに、人間が感覚的に把握し、社会的に行動する対象把握を避けて通れません。情報化による社会変化が安定する時期には、一定の役割を終えることもあるでしょう。しかし二一世紀初頭の今日、情報というテーマのもと、組織の流動性を保って何年間か決めたタイムスパンで新しい研究を立ち上げ、その成果を各部局に帰って頂く場として、情報学環は有効に機能出来ると思います。これは憲法学者としても、個人の私自身の信念でもあるのですが、オーソドックスなもの、それからやや離れたサブカルチャー的なものが適切に組み合わさったとき、最大の力が発揮されるように思います。それを引き出すための適切な形がある中で、多様なものをどうマネージメントしてゆくか、大学のこれからの問われるところだと思います。

Interview <<<

藤田 英典 教授

大学院教育学研究科長・教育学部長



大学の創設期から21世紀の今日にいたるまで、「大学組織」のもつ基本的な使命やアカデミックな倫理はあまり変わっていません。大学は一貫して、高度な専門教育、研究者の養成、研究の推進を3つの柱にしてきました。

□ 本文へつづく

歴史を振り返れば、近代的な大学の起源はヨーロッパの中世に遡ります。このうちイタリアのボローニャ大学などは学生の組合から、フランスのパリ大学やイギリスのオックスフォード大学などは教授の組合がもとになって出来たものです。今日までその基本は大きく変化していません。しかし、二一世紀初頭の今日、とりわけ重要であるのは、大学という組織の教育・研究の形態が変化しているという点でしょう。大学は、社会の中で知の生産を組織し、それを集合体として

遂行してゆく責任を負っています。そこで旧来の「閉じた」システムを「開かれた」システムにして行く必要があるのです。「学生」に関して言えば、これまでのようなフルタイムの学生だけでなく、夜間や社会人などパートタイムの学生にも門戸を拡大し、単位互換など他大学との交流もさらに促進して、国際的な視野から教育の連携推進が求められています。「スタッフ面」も同様で、いわゆるジョイント・アポイントメントの拡大や他の研究教育機関との連携・交流の促進や任期制の拡大など、多様な雇用形態・勤務形態のスタッフが活躍できるようにすることで、さまざまな人材活用の道が開かれます。法学部のビジネススクールセンターなど、ジョブ・ティーチャーによるトレーニング中心のプロフェッショナル・スクール、実践的専門教育の需要が高まり、今後は大学教員のステータスも多様化すると思います。「研究」に関して言うなら、人文社会科学でも欧米の枠組みやシステムに基づいて構築された理論を日本の現状に当てはめる、輸入型研究の時代は一九六〇年代までで終わっています。知のヘゲモニーをめぐる国際競争が激化している知的状況の中で、日本がもっと理論的にも発信し、国際的なアジェンダ設定力を高めて行く必要があると思います。

佐藤 慎一 教授

大学院人文社会系研究科長・文学部長



21世紀を迎え、世界、社会が大きく変化してゆく中で、東京大学も時代に沿って、必然的に変わって行かねばならないでしょう。伝統と知の蓄積を持つ文学部・大学院人文社会系研究科もまた、その例外ではありません。

□ 本文へつづく

狭い意味での「伝統」に安住して、時代の要請に従わなければ、人文学全体が崩れて行かざるを得ないとおもいます。これは大雑把な直感ですが、二〇〜三〇%の部分が適切に変わり、残りの七〇〜八〇%でオーソドックスな基礎を守ってゆくことが大切だと思えます。最近では、アメリカの制度に似て、大学四年間を教養教育、専門は大学院から、と見る傾向が強いのですが、私たちは逆に「many Specialization→Late Generalization」(先に専門教育、続いて総合教育を)

を基本に考えています。人文・社会科学では、分野の別によらず、一次資料に直接当たってそれを確かに読み解き、最終的に学術信頼性の高い論文にまとめるための「血の汗を流す」努力が、確かな専門能力を養うと思います。私の専門の中国哲学に近い例を挙げますと、「二十四史」や「四庫全書」など古典的な基礎文献がデータベース化されて、情報技術が研究を大きく推進させました。いまや研究にコンピュータは不可欠です。しかし、検索の結果得られたデータを確かに読み解く専門訓練を経た視点が必要ならば、真に国際発信力ある研究は出来ません。確かな基礎の上に立ちながら、専門の蛸壺化を防止する、専門分野間の交流演習(他分野交流演習)、あるいは理科系の教官・学生との知的交流を促進してゆきたいと思えます。二一世紀の社会は「生命・環境・情報倫理」などの「応用倫理学」をはじめ旧来の「文理」の枠を超えた新たな問題に直面しています。一方で「学力水準の低下」や「教養教育の全体的弱体化」が指摘されるなか、新しい時代の要請に従って柔軟な知を推進するために、私たちは新しい「共通の知の基盤」を作って行かねばなりません。二一世紀の人文学の社会的存在理由はまさにここに示されている、と私は思っています。